

# 小さな神秘の島で そっと手を合わせる

が期間限定のウニであり、体験ものであり、それらを組み合わせたものであるわけです。『私は関係ない』なんて言う人がいないように、志岐の人みんなが日本遺産の島で暮らしているという意識を持って、取り組んでいけたらいいですね。

内海湾のシンボルともいえる小島神社は、日本のモン・サン・ミシエルと呼ばれている。そう、ここは干潮時のみ渡れる神秘の島。潮が引くと、海面から神社へと続く参道が現れる。鳥居をくぐり、ぐるりと島の裏側へまわると、灯籠が見えてくる。この灯籠から続く道を登ると社殿にたどり着く。お参りを済ませ後ろを振り返ると、木々の向こうには美しい内海湾が広がっていた。

宮司の後藤須々美さんは「一支部を訪れた古代の人は、潮が引いた時に現れる陸地を利用して、荷の積み下ろしをしていました。この島は時代の流れを見つめて続けてきたんですね」と話す。小島神社では毎年旧暦の九月八日に大祭が行われ、神楽が舞われるという。氏子たちは潮の満ち引きに合わせて島を往来する。「たまに足を濡らしながら帰ることもありますが、お清めですから」と後藤さんは笑った。

志岐内海湾振興会  
TEL.090-1115-5822  
(事務局:大沢)

か つて一支部の玄関口であった内海湾の周囲には歴史や自然、文化はもちろん、食や特産品など、ここにしかないものがあふれている。そのひとつひとつをつなげて「内海湾ブランド」として確立していくことが、志岐内海湾振興会の目指すところ。

振興会のメンバーは四十七名。その中には小島神社の氏子をはじめ、旅館業や飲食業、交通や物産など、様々な業種の人たちがいる。彼らはもともとある商品をブランド化したり、新商品を開発したりと、互いに協力しあって事業を進めている。事務局長を務める大沢邦生さんは、小さなことでも、一人一人ができることをやっていく。そして、それを積み重ねていくことが大切だと言う。「私たちの目標は観光客の方に三百六十五日、毎日今しかないものを提供すること。それ

志岐内海湾振興会の大沢邦生さん



どこか素朴で懐かしやかな小島神社の彫り物



小島神社宮司の後藤須々美さん

